

自然共生河川研究所(岐阜分室)だより

岐阜分室 研究第三部 次長 梅谷内 信夫

中部地方建設局の若手職員と一緒に「河川勉強会」を開いています。

この勉強会は、最近環境面、特に生態関係の研究を進めながら、多自然型川づくりに取り組んでいます。そのためにはベースとなる河川工学や水理学といった河川のもつ現象の、本質的な部分をしっかりと高めていくことが大切であり、もう少し技術的な面の勉強をしていこうという主旨で開いています。

最近河川法が改正され、工事実施基本計画が変わって、河川整備基本方針、河川整備計画を定めていくことになっています。

この河川整備計画は20~30年の間に、どのような整備を進めるかについて、地域の方々の意見を聞きながらまとめていくことになっていますが、そのためには地域の方々に色々説明をしていく機会も、今まで以上に増えることになり、技術的な内容についても、より深い知識が要求されることから、この研究会がますます重要性を増しています。

今回は昨年11月25日に「計画流量と貯留規模の考え方」というテーマで、近畿大学の江藤剛治先生に講演をいただきましたが、その内容について概略記します。(細部の技術的対応策については割愛し、大局的な見方の部分についてのみ記述)

- ・100年後に残っている国はどこかと考えてみた場合、最も確率が高いのは日本である。しかし長期に何かを保存するとか、民族のアイデンティティーを保っていくという考えはヨーロッパの人の方が非常に強いが、日本人はそれほどでもない。これは我が国が安全過ぎるために疎いのではないか。
- ・アイデンティティーとなると、河川のあるべき方向、或いは我が国土のあるべき姿という立場から、もっと見つめ直すことが大切である。その時ベースとなるのは歴史ではないか。
- ・河川を考える場合「水防災システム」について検討し、その中で農地(水田)の役割や、都市開発の経緯を調べ、その中で河川の役割や、今までコンクリートや鋼材を使った構造にせざるを得なかった社会的要請と、その構造物が恒久的なものではなく、問題点も分かっていながら進めざるを得なかった流れを十分踏まえ、かなり先からこちらを見て、今やっている仕事ができるように位置付けられるのか認識することが大切である。
- ・既往最大流量に対応した河川改修というのは市民にと

って分かりやすいが、確率主義は非常に分かりづらい。しかし、経済性ということ考えた場合、そのうち便益を出そうとすれば確率を考えざるを得なくなる。

- ・我が国の経済状況が非常に厳しい状態に向かうことが予想されるが、その時に河川は放置したままでよいのかということになるが、これは放置して良いわけがないが、その時に経済性を超えて、何に頼って計画を立てるかが重要となる。
- ・河川整備を進めるに際し、市民の理解を得る必要があるが、その時、理論の話をも市民にしても理解してもらえない。
- ・そのような中で降雨確率が、流量確率かという議論をしても、それは対市民のための議論とはならない。
- ・理論は技術者自身が自信を持って市民に説明するために、自分自身が納得するための技術でないか、それで初めて説得力が出てくるわけですし、出来ることならそこに喜びがあるということが大事だと思う。
- ・とてつもなく大きい雨、確率的に見れば数千年確率の雨というものは、エルニーニョなど地球規模の異常気象を考えれば、どこでも起こり得るものであり、今までなくても、今後観測される可能性は十分ある。だから確率評価した場合、ばらつくのは当たり前であり、ぴしゃっと合う方が不自然である。

等の内容でした。

よりよい川づくりを進めるには、技術者として細部の問題に対応できる技術的能力と、行政の立場での大局的な見方との両方から判断できる河川技術者が一人でも多く育つことを願い、この勉強会が少しでも貢献できたらと考えて運営しています。



講演中の江藤教授